
ももちゃんに声を

うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ももちやんに声を

【Nコード】

N4047K

【作者名】

うさぎ

【あらすじ】

実の夫に暴力を振るわれ、離婚を決意した、母。娘に声を取り戻そうと頑張る母。母と娘の戦いが始まる……!!

幸せな日々・・・そして離婚

サクラが咲いた。

もう4月だから、当たり前なんだけど、なんだか、新鮮に思えた。

なぜなら・・・そこには愛する夫と、まだ3歳になったばかりの娘がいたからだった。

3歳になった娘のももは、父親である愁斗のもとへかけていく。

『おとーしゃん！！見てー！！』

小さな手に握られているそれは、4つ葉のクローバーだった。

『おー、すごいじゃないか。運がいいんだな、ももは』

そう言って微笑んでいた。

しかし、それも幸せは続かなかった。

幸せの糸が切れたのはももが小学校に上がったときだった。

愁斗の会社が破産して、解雇されてしまったのである。

それからというもの、愁斗はヤケ酒を煽り、しまいには私にまで暴力を振るうのだった。

それが原因だろうか、ももは愁斗や私に口を利けなくなってしまっ

た。

きつと、暴力を振るわれる私を見てしまったのだろう。

つらかった。いや、もっとつらいのはももの方かもしれない。

私は、離婚を決意したのである。

幸せな日々・・・そして離婚（後書き）

明日も読んでくださいね♪

もも、いめんね

離婚をしてから数日が過ぎた。

しかし、ももは喋ってくれない。

前のように擦り寄ってくることも笑うこともない。

できるのは・・・おびえる事だけ。

私が近づくとおびえる。

ちょっと触れるとビクつく。

私がした過ちはなかなか消えなかった。

私は寝てるももに向かって何度もごめんねと呟いては涙を流していた。

もちろん、そんなことじゃももはわかってくれない。

でも、それしか自分にできることはなかったのだった。

ある日のことだった。

私が家に帰ってくるとももが大事なティベアに八つ当たりをしていたのを目撃した。

ももから言わせて見ると、自分を喋れなくしたのは母親と実の父親

の愁斗だ。声さえあればなんだって訴えられるのに。と、まあこんな感じであろう。

ももは私と愁斗とももが写った写真たてをひつつかむと、床にたたきつけた。

割れてしまった。

粉々になった、思い出。

粉々に碎け散った、幸せ。

二度と戻る事はないだろうと思われる、あの幸せな日々。

私は、ただももを見つめる事しかできなかった。

もも、祖父の家へ

私はあれから3日悩んだ。

ももを田舎の祖父に預けてみたらどうだろうか、と。

しかし、それはつらい選択だった。

私はすぐに、祖父に連絡を入れた。

『あ、お父さん？ももを預かって欲しいの。うん。そうなの。ももの声が戻るまで……。そう。わかった。今日の午後にでも行く。はい。わかった。』

電話を切ると、ももに言った。

『もも??』

もちろん、返事などない。

『あのね、おじいちゃんの家にお泊りしてみようか。ももだけ。』

ももはなにも反応してくれなかったが、きっとわかってくれたのだろう。

いく準備をし始めた。

私はこれ以上ももを見ていられなくなり、その場を離れて、リビングへ向かった。

あと・・・5時間したら、ももは私からいなくなる。

これで最後の別れではないけれど、とてもつらかった。

どんな状況であろうと、ももは私の大事な娘であることにはかわりはないからだった。

祖父の家で

私はももを祖父と祖母の家に渡すと、涙を隠してももに手を振った。本当ならちゃんと抱きしめて、また帰ってくると伝えるべきなのに、それはしなかった。

ももが喋れなくなったのはわたしのせいでもあるからだった。

私はそのあと、東京に行って、友達の家に押しかけた。

すると、友達と言う。

『ももちゃんが喋れなくなったのは、アンタのせいじゃないよ。もしよかったら、私の友達のやってる神経・小児科に行ってみたらどうか？？紹介するよ？』

『ありがとう~~~~~』

それで、私は友達に連れられて、その病院に行ってみた。

そこには小さな建物が一軒建っていて、看板に、【ぞうさんクリニック】と書いてあるだけだった。

中に入ると、そこにいたのは・・・

とても若い先生だった。

私は、診察室に入ると、今までであったことすべてを打ち明けた。

すると、先生は言った。

『ももちゃんが喋れなくなったのは、美紀さんのせいではありません。もちろん、育児に失敗したわけでもないですよ。』

一番聞きたかった言葉だった。

そして、先生は、言う。

『そうだ。一度、ももちゃんを連れてきてくれませんか？無理ならば、僕から行きます』

私は、私が近づくと逃げようとすることを伝えたと、

先生は自分からももに会いに行くと言ってくれた。

私は、目の前にいる先生が、神様か天使のようにしかみえなかった。

もも、先生に会う

先生をもものところに案内すると、先生はまず、ももを抱きしめた。

そして、涙を流して頭を撫でて、『よくがんばったね、でも、悪いのはももちゃんでもお母さんでもお父さんでもないんだよ。だからもう、犯人探しをするのはやめようね』

ももは、静かに涙を流して先生に抱きついてコクンとうなずいたのである。

それから、毎日先生はももに会いに来てはももに向かって喋り続けた。

しだいにももは先生にだけ心を開くようになった。

先生には喋れるようになったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4047k/>

ももちゃんに声を

2010年10月11日20時37分発行